Colin, In-8°, 548 pages. 60fr.）（前川貞次郎）

○內蒙古・長城地帶　乙種第一號　東亞考古學叢刊

現時支那本土に於ける考古學的調査の殆ど見る可きものゝないのに對して、これを繞る諸地域に於ては、我國を初め歐米の諸學者に據つて着々たる業績が收められ、これに關しては事新しく述べ立てる迄もないことである。此處に紹介せんとする調査報告書の如きはかゝる業績の上に、更に光輝を添へるものと稱しても過言ではない。卽ち本書は水野精一・江上波夫兩學士が去る昭和五年內蒙古地方及び長城地帶を踏査し、其の地に於て親しく蒐集した諸資料に基いて研究した結果を發表されたもので、調査報告と稱するより寧ろ集成的研究と謂ふが當つて居る。

其の內容を見るに第一は蒙古石器時代の文化、第二は綏遠青銅器、第三は支那北疆に於ける繩蔕文土器遺蹟の三篇に分つて居る。第一篇に於ては先づ內蒙古錫林郭爾地方の新石器時代の遺跡に就いて記し、其の砂漠地帶であるところから、純粹なる包含層の發見は困難であるが多數の石器を獲た。此の石器は殆ど打製の細石器で、石材は多く碧玉・玉髓・瑪瑙等が用ひられ磨製品として砂岩から成る石棒・石皿・環石等がある。土器は其の存在僅少で種類も櫛目文のものを主とする。此等の出土品は此の地方に限らず、蒙古高原共通なものであるが、其の特色である細石器によつて、此の地の新石器時代の文化がアジア大陸の砂漠草原地帶に行はれた所謂 Microlithic Culture に屬することが明かである。而も最も親緣關係を有するのがロシア西比利亞地方の新石器時代である。然しそれと共に獨自の地方的特色を持つて居ることが窺はれる。又黃河流域の文化とも接觸のあつたことは一部共通の土器・石器を有することに據つて知られる。猶此處に注意すべきは蒙古高原に彩色土器の出土の缺けて居ることで、この土器はその根源が西方に求められ而も彼地に於ては細石器に伴はれて居る場合が多い。此の點から、蒙古高原に於ては單に細石器のみを輸入し、これに反して黃河流域に於ては彩色土器のみを採用したことが推測される。

儲て蒙古細石器文化の實年代は何時頃に求む可きであらうか。蒙古自體に於ては年代觀の準據を有しないので、隣接諸文化圏の年代からこれを推定しなければならぬ。僅少ではあるが鬲形土器や繩文土器の存在が先づ手掛りを與へる。これ等の土器は先秦文化を特色付けるものであり、其の年代の上限は BC 2000 とされて居る故、少くともこゝに兩文化の併行が考へられる。加之、西亞に於ける細石器文化の年代も BC 4—3500 に溯ることが說かれて居る。これ等の事實から、自ら蒙古細石器文化年代の上限も推定されやう。而して此の時代は所謂スキート・シベリア式青銅器文化が此の地方を覆ふに至るまで、卽ち BC 500 頃まで繼續した。此の期間に於ける彼等の生活を窺ふに、其の遺物に據つて察せられる樣に、農耕生活を營まず狩獵民族として專ら遊牧生活に從つたのであつた。土器の發達に於て見る可きものゝないのも亦此處に起因すると云へやう。

第二篇はオルドス・綏遠地方を中心として出土する特色ある青銅器、此處に所謂綏遠青銅器に關する解說である。此の青銅器を伴ふ文化を從來一般的にはスキート・シベリア文化或は北方ユウラシア文化の名稱の下に呼んで居るが、近來此の方面の研究が漸次進步すると共に其の地方的な特色も明かにされ、從つて名稱も變化して、或はスキート蒙古文化とか、更に又、オルドス青銅器文化・綏遠青銅器文化等の名を冠するに至つた。兩學士は此の特色ある所謂綏遠青銅器を直接綏遠・包頭・五原等の現地に於て購入し、それに據り出土地の範圍を限定し、其の調査に基いて總括的な考察を試みたのである。此の購入品の種類は甚だ多く、其の大略を擧げても、銅斧・銅劍・刀子等の利器を初め、甲冑等の武具、馬面・轡等の馬具類或は革金具・鉸具の如き、又は銅容器の如き、其の他古錢・鏡鑑・印章等に及んで居る。—彼の銅劍と輕路・徑路との關係、帶鈎と師比・犀毗との關係に於ける如き、或は十字架形・卍字形の印章類が元代の景敎徒たる翁牛特族のものであることの如きは固より研究の主題外に屬するものであるとしても興味深いものである。—儲て、此等の器物を通じて、鑄造の粗末なことゝ、裝飾意匠に動

物文の豐富なことが尤も注意されるが、此等の種々の特質を求め、これを産出した文化を推察する際、西比利亞のミヌシンスク文化、支那に於ける秦漢文化と對比するならば一層明瞭に把握されやう。飜つて想ふに、ミヌシンスク文化は大略二つの時期に劃されて居る。卽ち南露のスキート動物意匠の輸入以前とそれ以後とである。所謂スキート・シベリヤ文化とは輸入以後の時代を指し、其の時期はほゞ BC 500 以後とされて居る。此の二時期の相違を綏遠靑銅器遺物に比較する場合同樣の相違を持つ遺品が矢張り看取され、このことはやがて、綏遠靑銅文化をば同樣 BC 500 を境として前後二時期に劃することの可能性を考へしめる。一方、黃河流域に於て發展した秦漢文化に就いて見るに、これは謂ふ迄もなく、周式文化の繼承ではあるが、その間自ら差違が存するのであつて、其の一つとして西北方文化卽ちスキート・シベリア文化の影響が特に指摘される。この影響は秦漢式文化、嚴密に謂ふならば秦式文物の上に殆ど總て現れて居る。此處に秦式と稱するのは歷史上からする秦代の樣式の意味ではなく其の行流年代は BC 500 頃までも遡り得る。——所謂秦式の名稱は淮河式・秦楚式・戰國(秦)式・或は周末漢初・新式期等を以つても行はれて居るが、其の行流年代の中心が戰國時代にあると考へられる點からこれを戰國式と呼ぶのが最も穩當と想ふ。——此の秦式文物は其の形式的併行關係を綏遠靑銅器の內に認めることが出來、而も此の形式のものが綏遠靑銅器文化の中心時期に當つて居ることが知れる。これは取りも直さず綏遠靑銅器文化の最盛期を秦式文化期と對應せしめて、後者の年代から前者のそれを比定することを又可能ならしめる。卽ち秦式靑銅器文化は BC 500-BC 200 降つても BC 100 までの時期であるから、この時期が又綏遠靑銅器文化の盛期を劃するのである。これに續く時期に於ては逆に黃河中原の文化が完全に長城地帶を掩ひ綏遠文化を却つて自個の影響の下に置くといふことが現れた。このことは漢民族の政治的發展と連關してより明白に理解される。この時期が BC 200 頃から AD 2—300 頃にまで亙り、かくて鐵器時代となるのである。此の時期を綏遠靑銅文

化の晩期とする。要するに前後二期に大別し、後期は又盛期晩期の二期に分かたれる。この文化の分布はオルドス・綏遠地方を中心とし東は熱河地方、西は甘肅に及ぶ長城地帶、南は汾水の上流に延び、北は滿蒙を覆ふ廣大なる地域に及んで居る。果して然らばかくの如き文化の所有者は如何なる民族であつたであらうか。これを歴史上に求むるならば當時漢民族と對抗して西北に雄飛した匈奴に外ならない。

第三篇は平綏鐵路沿線地帶、卽ち陰山山脈の南にある高原地方に於ける十一個處の遺蹟調査の報告である。內九個處は漢式の遺蹟で而も聚落趾が大部分を占めて居る出土品は石器をも含んで居るが殊に特色のあるものは繩蓆紋土器である。此等の遺蹟遺物を通じて見るときは、漢代に於ける漢民族の勢力進出が單に軍事的・政治的なものに止まらなかつたことが推測される。卽ち此等の背後にあつて定居聚落による經濟的殖民が行はれたことが知れる。かゝる情況の下にあつて此の地方の遊牧民族は如何であつたであらうか。遺物の語る所、彼等は漢文化の影響の下に特種な生活を維持して居たことが察せられる。

以上大略ではあるが三篇の內容の紹介である。此の三篇は勿論獨立的な調査報告ではあるが、地域的に年代的に相連關し而も古代に於ける漢民族と北方民族との接觸狀態の解明に資する所大なりと謂ふ可きであらう。中に就いて第二篇に解說して居る綏遠靑銅器は近時流行とも云はれる程一般的に論ぜられて居る。兩學士に據つて試みられた考察は氏等自らも言及して居る如く嚴密なる考古學的立場からは其の方法に於て缺けるところがあり、又購入の規準に就いて必しも不安なしとは謂ふを得ない。然も地域を或る程度限定し得たと云ふ點に於て從來に過ぎ、資料の蒐集に當つては零細なるものにまで及んで居る點で其の勞を多とせねばならぬ。要するに今後の研究は或る點に就いて更に明確にされるであらうし、新しい事實も發見されるであらう。而して其の結果或る點に就いては訂正されねばならぬかも知れぬ。而も既に此の方面に不充分ながら一二の總括的研究もあるのであるから必しも其の功績の全部が貶はされるべきではないと

しても、これが考古學・東洋史學に對する寄與は吝なく認められるべきであると想ふ。(四六倍版、東亞考古學會發行定價十圓)(小野)

○近畿地方古墳墓の調査　一

日本古文化研究所報告　第一

日本古文化研究所の考古學的方面に於ける昨昭和九年度の活躍は梅原京大助教授の手によつて、日本に於ける古墳墓の中、近畿地方のものに對してなされたのである。卽ち本書がその報告として提出せられたものである。

本書に於いてなされた古墳墓の調査は大和にあつては奈良市鶯塚古墳、越岩屋山古墳、櫻井町艸墓古墳、平群村西宮古墳の四基、山城にては乙訓郡雁子岳の一古墳、攝津にては耳原古墳、鉢塚古墳、火打村勝福寺古墳の三基、河内にては寛弘寺の一古墳、飛鳥の石室古墳二基、五條の方形墳の四基、通計十二基の古墳と附錄として備後御年代古墳の調査をのせられてゐる。これらの十數基の古墳は、その中二三の封土の調査されなかつたものを含むが他はすべて封土の實測と石室の實測をあはせ行ひ、從來この二者が一般に切りはなされて考へられ特に封土の如きはその實測に多人數の協力を要するものなる點より行はれたること極めてまれであつたものであるが、本書に於てはじめて古墳外形の實測と古墳主體の實測とを共に行ひその間に於ける二者のより高次な連繫を考へんとした。從來行はれきたつた封土、石室、及び遺物の三者の各々個別的なる研究に對して、この三者の綜合的同時的研究よりする全的古墳の有機的存在形態を見極めんとの意圖によつてなされたものゝ先づ最初に世にあらはれた成書である。從つて同一の意圖によつて以後本研究所に於てなされると豫定せられる古墳調査の繼續の結果はこゝに我國古墳の鬱然たる書籍化が完成せられるであらう。

此如き研究態度をもつてする時は、本報告書の如き僅々十數基の古墳の調査の結果に於ても左記の如き新事實を知る事ができたのである。卽ちその重なるものを擧ぐるならば、遺骸の埋葬後に戸口の構造部分が封土の外に